

谷根千・駒込・光源寺隊の福島応援レポート①

福島県伊達市の伊達東仮設住宅集会所に

ミシン3台を寄贈に行きました

～谷根千・駒込・光源寺隊から飯館の方に～

(レポート / 菊池京子・写真 / 小松崎栄

一)

2013年12月15日、谷根千・駒込・光源寺隊として、飯館村からの避難者が暮らしておられる福島県伊達市の伊達東仮設住宅の集会所に、ミシン3台を届けてきました。

その模様と、福島市内で出会った除染活動の様子、市街地を走った様子などを3回に分けてレポートしました。写真は小松崎栄一さんの撮影によるものです。

〈雪もよいの中を福島へ、JA新福島の直売所に立ち寄る〉

12月15日朝6時半、小松崎栄一さんの車に3台のミシンを積み込み、先方への交渉・連絡を続けてきた菊池が同乗して光源寺を出発しました。

運んだ3台のミシンは、北区リサイクラー活動機構・滝野川エコ広場館から、震災被災者に役立ててほしいと谷根千・駒込・光源寺隊が託されたものです。エコ広場館は震災直後から宮城・岩手・長野などに支援物資を寄付しており、谷根千・駒込・光源寺隊も、物資の提供の呼びかけにたびたび応じていただいています。

この日は前日から寒波が到来、福島県中通りは雪という情報でした。しかし、このミシンのことは3月末ごろから先方に寄贈の旨連絡を取り合ってきたので、せめて年内は届けようと決行しました。

途中、白河でチェーン規制がありました。10時過ぎに福島飯坂インターチェンジに無事到着し、福島市内に入りました。

伊達市の仮設までの道すがら、JA新福島の農産物直売所本店をのぞきました。

駐車場の隅々には雪が掻き寄せられており、空からもちらちらと降り続けています。店内には根菜類や葉もの野菜、白菜などが並んで「冬本番」の様相です。乾燥豆類や餅などもほとんどが生産者の名前を明記して販売されていました。福島は果物王国、丸々とした林檎も並び、お歳暮用に箱で積み上げられています。開店直後にもかかわらず客足はますますで、お客さんたちは品定めしながら野菜をカゴに入れていました。

棚や壁など随所にJA福島で行われている食品の放射線線量検査の様子が手順を追って写真で説明されていましたが、そこには検出限界値に関する細かい標記は特になく、基本的に各畑で取れたものを抽出検査して規制値以下であるものが並んでいる、という前提です。

後日JA新福島に電話で確認したところ、検出限界値を標記していないのは、「調べたのはあくまで抽出した作物であって棚に並んでいるものの検査結果そのものではないから、表示を控えている」とのことでした。

〈伊達東仮設住宅 集会所からは桜並木が見える〉

11時ちょうどに伊達東仮設の集会所に到着し、集会所の世話役をなさっている長谷川花子さんに会うことができました。

3台は全部調節済みであること、マニュアルが付いているかどうかも共に確認しつつ、この日の年月日と寄贈：谷根千・駒込・光源寺隊とマジックでボディに記入しました。



その後、今の仮設や飯館村の状況、避難の頃の様子などもうかがいました。

この仮設に入居が始まったのは2011年8月1日から。現在は90軒147名の方が暮らしているそうです。一人暮らしの70代～80代の高齢者が多く、同じ飯館村民とはいえ入居当初は知らない同士が多かったとか。しかし、時間が経つ中で、たとえば近くに畑を借りるなど住民みんなで工夫や努力を重ねて、多くの方々が交流を持って暮らすようになってきていること、今の伊達仮設の方々はとても結束が固くなっていることなどをうかがいました。

集会所の大きな窓からは仮設住宅の屋根の向こうに桜の並木が見えます。咲いたらとてもきれいで、夏には集会所などの周囲に縁台のようなものを設えて夕涼みする方が多いのだとか。それでおしゃべりしたり声を掛け合ったりして、交流が深まってきたそうです。

飯館村の方の仮設住宅は福島市松川町にもありますが、長谷川さんは「ここの仮設は周辺の公共施設（郵便局や公民館、買い物施設など）が歩いていける程度に近いので、住民の健康管理にも良い環境」と話していました。

長谷川さんご自身は仮設住宅で舅姑世代と2軒で隣居していますが、小さな子どものいる息子さん一家などお子さんたちは山形県などに避難して別居状態にあり、村民の方々も困難な状況に置かれていることがよく分かります。

「事故前は飯館はたいがいの家が3世代4世代で住んでいてそれが普通だったんですが、お年寄りにはここでは一人暮らしになっちゃってね。前は家の中で畑や家事なんかの仕事や役割がみんなあったのに、ここでは自分の健康管理が仕事みたいになっちゃったんですよ。ある時フェンスの根方に野菜を植えた方がいて問題になってしまって、それでみんなが使える畑を、伊達市に協力してもらって近くに借りるようになりました」

と長谷川さん。最初は2カ所だった畑も今は5カ所あるそうです。

ただ、帰村に関してどういう状況か質問すると、村は帰村を進めたい意向だが時間を経るごとに「帰村したい」という村民の割合が減ってきていて、アンケートでは帰村に否定的な答えの人の合計は4割以上にのぼり、今すぐ帰りたいという人は高齢者ばかりで村民の中でも300人ほどであるという答えが返ってきました。

放射能に関しての理解や認識や思惑にはそれぞれに違いがあつて、家族離れ離れの暮らしの他にも見えない意識の部分で村民の分断が進んでいることなども率直に語ってくれました。

「村民同士でも自然に除染の話が出るんですが、現状では3%しか済んでいない状態ですから帰村云々を考えることはできないでしょう」（長谷川花子さん）。

長谷川さん一家は飯舘村で酪農を営んでいましたが、原発事故後搾乳した牛乳から放射能が検出されたために、避難で村を離れるまでの間、毎日搾った乳を、土を掘って捨てていたそうです。

そうした避難までのことや避難後のこと、飯舘村の今後などについて、ご主人の健一さんは全国各地を回ってこれまでに200回も講演しておられるそうです。この日も外出していて、花子さんがご主人の分も話をしてくれました。

今回のミシンの贈呈の話は、2013年3月に東京大学で行われたシンポジウムにこの伊達東仮設で避難生活をしておられる菅野榮子さんがパネリストとして参加され、菊池が声をかけたことがきっかけでした。そのご縁で6月には、いわき桜会から寄せられた着物を村の洋裁・手芸グループに材料として提供させていただくこともできました。

菅野さんは味噌づくりや凍み餅作り、漬物作りの名人で、ミシンをお届けしたこの日は近隣にキムチ漬けの作業に出かけていてお目にかかれませんでした。

長谷川花子さんは、「『何でおれら、こんな目に遭わなきゃなんないかなあ』ってみんな思っているし、口にもしますよ。でもこの仮設に住んでいる人たち、特に前田という区の方が多いんですが、団結力がとても強いんです」と力強くおっしゃっていたことに、土や生き物と共に生きて来た方の強さを見る思いがしました。

今後も、いわき市四倉の鬼越仮設住宅の方々や久之浜の方々と同様、細くてもつながりを持っていきたいと感じました。





(2014 年 1 月 6 日 ・ レポート 連載① 了)